

特集

白球の系譜

土浦日本大学高等学校
硬式野球部 監督 / 教諭

小菅 勲

(水海道中学校出身)



8月6日から23日まで阪神甲子園球場（兵庫県西宮市）で開催された全国高校野球選手権記念大会。

茨城県代表として出場した土浦日本大学高等学校（以下、土浦日大）硬式野球部が茨城県勢として20年ぶりとなる4強入りを果たしました。

今月号では、そんな土浦日大硬式野球部を率いた、当市出身の小菅勲監督と、監督の教え子であり、チームの参謀役として勝利に貢献した、当市在住の丸林直樹コーチに話を聞きました。

——春夏通じて学校として初の4強入りを果たした感想をお聞かせください。

このチームは、甲子園で勝つことを目標に練習してきたチームなので、まずその成果が出せたということが非常に嬉しく思います。

OBの皆さんとか関係者の皆さんにいつも応援していただいているので、そういった方々に恩返しができたということも喜ばしく思っています。

——20年前の4強入りは、監督の恩師である木内監督が率いる常総学院が成し遂げましたが、木内監督に何と報告しますか？

甲子園から帰ってきた翌日にお墓の方に行きまして、ご報告とその成果を話してきたんですけど「まだまだ」だとか「こんなんでも満足するな」なんていう声が聞こえてきたような気がしました。

木内監督は、甲子園で40勝、優勝も3回もされてい

る方なので、まだまだ足元にも及ばないですね。だからこそ、良い目標にもなります。

話すだけがコミュニケーションではない

——自身も木内監督という名将の下で甲子園優勝という輝かしい結果を残していますが、監督として木内監督から学んだことあれば、お聞かせください。

まず信念ですね。技術的な事とかは別に学んだつもりはないんですけども、野球をやる信念で、その中でも選手あつての監督なんだということです。

(選手の所に)とにかく降りて行きなさいと、目線は低くして、選手の様子とか何を考えてるんだろうって

いう機微ですね。それに敏感になりなさいと、そこが土台ということを教わりまして、自分のモットーでもあるんですけど「目線は低く、志は高く」っていうのは、木内さんから学んだような気がします。

選手とのコミュニケーションもその立場です。話すだけがコミュニケーションではないと思うんです。彼らは今何を欲しているのかなとか、今どんな状況なのかなとか、そういった選手の立場を常に鑑みながら練習をしていく野球をやっていくっていうのが大事なんだということは、これは木内さんがあの時代にやって考えてこられた実践しておられたことなので。今の時代の私たちはもっとアップデートしてやっていくしかないといつも思っています。



◀昭和59年の甲子園決勝でPL学園を破り優勝を飾った際のインタビュー記事。

将来は、高校野球の監督になりたいと書かれています。

下の二次元コードから当時の広報紙を読むことができます。



(広報みつかいどう昭和59年9月号)

限界を超えてこそ脱皮・成長ができる

——選手が甲子園の雰囲気にも香られず、自身を持ってプレーをしていたように見えました。普段の練習の成果と思われませんが、どのような練習をしていますか？

甲子園は、やっぱりお客さんも楽しんでますし、こっちも真剣勝負を楽しみますし、非常に抽象的なんですけど、甲子園と一体化しようねっていう話をしたんですね。

そういう意味では非常に選手達ものびのびと楽しんで野球をしていたと思います。

普段の練習は基礎基本を大事にして特別なメニューをこなしてはいるつもりはないんですけども、やっぱり1球1球大事にするっていうのが大事な事だと思います。野球では古くから一球入魂という言葉がありま

すが、まさにそれを実際に体現できたチームだったので、その分、結果もついてきたと思います。

あと、限界を超えないとなかなか脱皮成長できないので、それについては冬の間猛練習をします。

寝ないで4部制で練習してみたり。朝の4時から8時まで、今度は9時から12時まで、今度は1時から4時までで、夜の6時から8時までの4部ですね。そういった練習を7日間ぐらい繰り返したり、夜に筑波山に歩いて行って、朝に筑波山を登って下りて、帰ってきて練習するという事はやりました。

選手に自信をつけさせるためですね。俺はここまでやったんだというのをやっぱり体験してもらいたいっていうことで、そういったことも強さの一つにはなってるかもしれません。

土浦日本大学高等学校
硬式野球部 コーチ

丸林直樹

(石下中学校出身)



丸林コーチは、小菅監督が初めて監督を務めた伊奈高校の選手で、主将として茨城大会ベスト8の成績を残しました。卒業後は働きながら、小菅監督が異動した先の下妻二、土浦日大でもコーチとしてチームの育成に尽力し、5度の甲子園出場を後押ししています。

土浦日大硬式野球部の部員が入部前に配られるテキスト、いわば「野球の教科書」。丸林コーチはこのテキストを一から作り上げ、甲子園の快進撃の原動力になりました。

——コーチになったきっかけを教えてください。

当時、伊奈高の野球部には、コーチというポジションの方は不在で、実質、小菅監督1人で、チームを見ていました。

私が、就職が決まった報告を、小菅監督にお伝えすると「ぜひ、グラウンドで手伝ってくれ」「指導者として、一緒に甲子園出場を実現させよう！」とノック用の手袋とシューズをプレゼントされました。

これがコーチになったきっかけです。

——チーム内での役割を教えてください。

周囲の方には「参謀役」と言われたりしていますが、裏方の目立たぬ立場で、選手のために、監督さんのために、チームをサポート出来ればと考えています。

土浦日大では、4月～6月までは、1年生と2年生が所属する（二軍チーム）に対して、小菅野球のイロハ（高校野球の基本）を、テキストを使いながら教えています。

週末は、その1、2年生を連れて、全国各地の甲子

園常連校にバスで出向き、二軍戦と言われる練習試合を行い、秋季大会に出場する新チームの土台を作っています。

二軍戦の遠征では、北は東北エリア、南は関西エリアまで移動し、総走行距離は700～1,000 kmを超える時もあります。

7～8月は、夏の選手権大会となるため、地方大会、甲子園大会で、アナライザーとして、対戦チームの偵察を行い、データ分析・戦略シートを作成し、試合の



前日などに選手達へレクチャーを行います。分析・戦略シートには、相手投手の攻略方法や相手打者の苦手な球種やコースなど、詳細に資料を作ります。

8月に、新チーム（1、2年生）が結成されると、監督さんに、新チームの引継ぎを行い、秋季大会と一緒に戦います。

12月から3月までのオフシーズンでは、強化合宿をはじめ、練習メニューを組み立て、その年代に見合った戦術の練習を指揮します。



甲子園でのウィングボールを選手達から受け取る丸林コーチ（大阪市の宿舎にて）

勝ちを意識しすぎず、試合を楽しむ気持ちで

——茨城県勢は、甲子園の1回戦の壁が立ちはだかっている印象でしたが、今年は4強入りの大躍進をしました。この要因としては何があげられるでしょうか。

今年の夏は、無欲の勝利…。そんな感じです。

甲子園の初戦は、本当に難しいと感じています。約48,000人の甲子園という大舞台上、普段どおりの野球をしようと言っても限界があります。

これまでは「勝ちたい!」「絶対勝つんだ!」と、気持ちが前のめりになっていたように感じます。一方で「今年は、これまで、つらく厳しい練習をやってきたんだから、結果はどうあれ、今を楽しもう!」と…。いわゆる無欲でした。

これが、結果として、延長戦を制したり、奇跡的な逆転劇を演じ、ベスト4という結果に繋がったと思います。

——春夏通じて学校として初の4強入りを果たした感想をお聞かせください。

選手達には、土浦日大の硬式野球部として、新たな歴史を作ってくれた事に感謝しています。

一方で、宿舎に戻ってきて、指導者と最後の挨拶を

すると、選手達は、大粒の涙を流していました。やっぱり悔しいですね…。

こうした涙を流した選手達のみで、次の世代では、この戦績を超えるような練習をもっとしないといけないと感じています。

——練習で心がけていることを教えてください。

普段の練習では、私は、主に戦術面を任されていて、練習中、選手達には、きつい言葉も投げかけます。それは、選手の「甘え」を許したくないからです。高校を卒業し、大人になれば誰も助けてくれない。自分一人で生き抜く力を若いうちに育まなければならない。それを、野球を通じて教えようとしています。

また、1つのプレーに対する私の要求も高いため、選手達もついてくるのが大変な時もあります。それでも、他の指導者が選手達を私以上に成長させられるかといったら「違う」と断言できます。誰よりも、選手達の「のびしろ」を作るだけの自信は持っています。

例えば、1年を通して1回発生するか分からないプレーでも、徹底的に練習します。試合中に不測の状況が起きて、選手達に「このプレーは練習していない」と思われる事は絶対にあってはならないからです。

—丸林コーチにとって小菅監督はどんな存在ですか？

高校時代の恩師にあたりますが、学生時代は、監督と選手という立場でしたから、今と違って怖い存在で（笑）、全国制覇をなされた方が監督をやっているというオーラというか、カリスマ性のある存在感は大きく感じていました。

ただ、私が選手の頃から、現在も監督さんが「目線は低く、志は高く」と言うように、選手目線で「甲子園はこんなにいい所だよ！」といつも希望を持たせてくださって「努力をすれば、必ず夢は実現できるぞ！」という事を体現していましたので、選手達は、とてもやりがいを感じていました。

また、当時から、積極的に水分補給をする、休息を積極的に取る、髪型も坊主じゃなくてもよいと、選手の自主性を重んじるスタイルでしたので、全体練習は短くても、各自で行う自主練習をたくさんやった事を思い出します。

現在は、監督とコーチ（師匠と弟子）という立場で、約30年のお付き合いとなりますので、監督さんの考えている事は、だいたい分かるようになってきました（笑）

土浦日大でも、私をはじめとする複数のコーチ陣に対し、他愛のない話もしますし、アットホームな雰囲気、どんな事でも言い合える仲間・同志のような存在でもあります。



—小菅監督にとって丸林コーチはどんな存在ですか？

右腕とか左腕とかって話がありますが、そういったものを超越した貴重な存在ですね。

まず、彼無しでのチーム作りはあり得ない、考えられないです。

彼は高校の時の取り組みが全然違いました。誰よりも練習していましたし、誰よりもチームのことを考えてました。とにかく野球が好きですよ。だから一緒にチーム作りしてくれないかと声掛けをしました。

もう師弟の関係は超えていて、自分は本当に尊敬しています。

出会いによって人生は変わるっていうのをよく言われますけれども、彼と出会えて本当に良かったなって思っています。大事なパートナーですね。

自然体で付き合ってますけども、もう阿吽の呼吸で彼とは色んなやり取りができます。

笑い話になっちゃうんですけど「今度はどこどここのチームとやるんだ、そこで偵察に行ってもらえないか」と彼に話したら「実は今そのグラウンドにいますよ」なんて言うのが1度や2度じゃないんですよ（笑）。

ほんと不思議なもので「どこどここのチームの映像をちょっと見たいんだけど」って言ったら「今、まさにそのDVDを包んでいるところでした」とか、そういうことが本当にあるんですよ。

それもチームの事を考えての行動だと思うんですけども、そんな感じですよ。



土浦日大硬式野球部の強さの秘訣や上達の秘訣を聞いた、それぞれのインタビュー全文は市公式noteに掲載しています。